覚鑁における順次往生についての一考察

鍵和田　聖子

はじめに

興教大師覚鑁（一〇九五～一一四四・以下覚鑁）の主著である『五輪九字明秘密釈』は五輪と九字の曼荼羅観を中心に、思想面から事相面に至るまで豊富な内容を含んだ書物であり、覚鑁の密教的機根観が詳細に説き示されているという点でも注目されてきた。さらに、本書は異名を『頓悟往生秘観』と言い、特徴的な往生観を説いている。中でも現身往生と順次往生という用語を用いた機根論については、議論を呼ぶところであるが、これを端的に示して宮坂宥勝氏は、

現身往生は密教の即身成仏であり、順次往生は浄土教の願生浄土（極楽往生）であるが、よしんば即身成仏が得られなくても、必ず願生浄土が得られることによって、何びとも往生成仏を実現することができるとする信念は一切衆生皆成仏道を明白に打ち出したものといえる[1]。

と纏めている。このように、一般的には現身往生が即身成仏、順次往生が極楽往生と考えられてきた。しかし順次往生については、覚鑁自身が詳細な説明を行っておらず、また、『五輪九字明秘密釈』での説き方が、当来世における極楽往生とも、現生における即身成仏とも受け取れることから、その捉え方を巡って多くの先学が種々の論を展開している。現在なされている覚鑁の研究に於いても、順次往生についての考察を含むものが多く、覚鑁を研究する上で最も注目される論題の一つと言えよう[2]。なお、そういった先行研究では、全体的には「現身往生も順次往生も結局は密教の即身成仏を説いたものである。」と結論づける傾向が強いものの、順次往生がどういった内容を指すのかについては、検討の余地が残されているものと考えられる。

そこで、本論では『五輪九字明秘密釈』を中心に覚鑁の文献全般を再確認し、「順次往生」の意味を新たな角度から再検討していきたい。

一、『五輪九字明秘密釈』における現身往生と順次往生

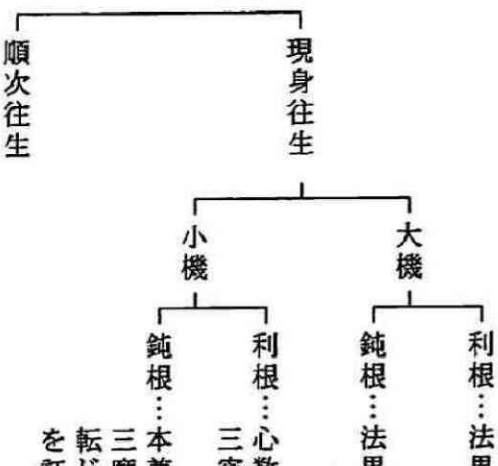
まずは『五輪九字明秘密釈』において現身往生と順次往生がどのように論述されているのかを確認しておきたい。覚鑁は『同書』の「第九所化機人差別門」の中で往生の機類について以下のように分類する。

於此ノ所化ノ機ニ総シテ有リ二類一。一ニハ現身往生、二ニハ順次往生ナリ。於ニ現身門一ニ又二ノ別アリ。一ニハ大機ノ即身成仏。二ニハ小機ノ即身成仏ナリ。又於レテ二ニ各々有レリ二、利鈍別ナルガ故ニ。

（『興全』一、下・一一七四）

ここで、往生には現身往生と順次往生の二機があるとし、そのうち、現身往生を大機と小機に分けた上で、大・小それぞれに利・鈍の差別を設けている。右記漢文中に表れている通り、覚鑁は現身往生を説明する際に「大機の即身成仏」、「小機の即身成仏」と表現しており、現身往生は即身成仏を指していると判断して良いであろう。なお、本書では右記の文章に続いて、現身往生の機類の

差別が大変詳細に説き示されている。それを表にまとめると以下のようになる。



以上のように現身往生は、詳細に分類され、その内容もかなり明確に示されているのであるが、順次往生については特別言及されておらず、不明確と言える。なお、他に順次往生について言及される部分を「第十発起問答決疑門」に見出すことができる。それが以下の問答である。

問、依二五輪門一機二有二幾ク種一カ　答、有二二種一ノ機一。一ニハ上根上智、期二即身成仏一ヲ。一ニハ但信行浅、期二順次往生一ヲ。就テ二此ノ行者一亦有レリ多。正ク往二生一シ密厳浄土一ニ。兼テハ有レリ期二ス十方浄土一ヲ。（『興全』下・一一七八）

これによると、「ただ信じるのみで行の浅いものが順次往生を期する」と解せ、「本来は密厳浄土に往生するが、合わせてその他十方浄土にも往生する。」というように説明されている。順次往生の行者の往生先が、密厳浄土とも十方浄土とも受け取れる記述であり、順次往生の指す内容は、やはり明確とは言えない。

そこで、まず、以下に先行研究ではどのように考察されてきたのかをまとめてみたい。

二、順次往生に関する先行研究

順次往生について言及する研究を内容的に整理すると、大きく分けて

①順次往生とは、最終的には即身成仏同様、この身そのままに仏果を成ずるものである。
②順次往生は基本的に未来隔生の意に解するのが妥当である。
③順次往生とは、第二住心から第九住心を順次に次第するものを指す。

の三種類に分類できると言えよう。

まず、①に分類される代表的な研究を挙げると、また、松崎恵水氏は、右に記した『五輪九字明秘密釈』の文と、『密厳浄土略観』の

機縁未レ熟ルヲバ　熟セ、且ク安二ム応化ノ浄土一ニ。次ニ迎ヘ二法性ノ妙国一ニ、応レ二ジテ時ニ超テ二九界之迷因一ヲ。即身ニ

開カシム三密之仏果ヲ。（『興全』下・一一九〇）

という一文から、

覚鑁のいわれる「往生」とは一つの悟境を表すことばと考えられ、但信行浅にして念仏往生を願う者が、その意楽によって先に一門の応化諸尊の十方浄土のうちのいずれかの浄土に往生し、ついで普門大日如来の密厳浄土に往生する意であることがわかり、しかも順次往生といわれながら、やはり即身に仏果を成ずるものであることが判明するのである。[4]

と指摘している。なお、苫米地誠一氏も、ほぼ同様の見解を述べているが、さらに覚鑁の密厳浄土往生思想には深化・発展がみられる[5]ことを示唆している。

次に②に分類される研究としては、まず那須政隆氏を挙げることができる。那須氏は「一、」にて引用した「第十発起問答決疑門」の「二ニハ但信行浅、期スニ順次往生ヲ。就テ此ノ行者ニ亦有リ多。正クハ往ニ生シ密厳浄土ニ。兼テハ有リ期スル十方浄土ヲ。」という文章を

数ある衆生のうちには、その性下劣蒙昧にして、現身往生を念願せず、寧ろ未来往生を希ふものがあるけれども、かかる衆生といへども、五輪門の法門を深信決定すれば、何の行を用ひずして、往生の素懐を遂げることが可能る。その欲する浄土が、よしんば大日如来の密厳浄土であろうと、また十方諸仏の浄土であろうと、その意欲するところに従って往生することが可能る[6]。

と解釈されており、順次往生を未来隔生の往生と理解する。そして、「正クハ往ニ生シ密厳浄土ニ。兼テハ有リ期スル十方浄土ヲ。」の一文については、行者の欲するところに従ってどこへでも往生できるという意に捉えている。

また、元山公寿氏[7]は、「信だけで行のないものは順次往生するとして、即身成仏することは不可能であると考えていたものといえよう」とし、隔生成仏を指すとは明確に言わないものの、順次往生は即身成仏とは別の往生を指すと理解しているようである。

なお、①②の両方を包含している論としては橘信雄氏が挙げられる[8]。橘氏は、基本的には順次往生を未来隔生の意に解するのが妥当としているが、覚鑁の他の著作を考え合わせれば但信行浅の機類も現身往生に於ける大小二機のうちの小機と理解し得る[9]と指摘され、覚鑁の意図としては順次往生の機類も真言の正機とみなし、最終的には即身成仏へと導くもの[10]であったのではないかと理解している。しかし、その上で、最終的に現身往生と順次往生の二類は、「行者の意楽の欲するところによってのみ分けられる」と前述した那須氏の解釈に沿うような結論を導き出している。

最後に③に分類される研究としては、中條賢海氏[11]が挙げられる。中條氏は『五輪九字明秘密釈』「第六上品上生現生門」の以下の箇所を引き、覚鑁の言う順次往生は「第二住心から第九住心を順次に次第して住するもの」を指すと解釈している。

正クハ為メ真言漸次行者ノ所経ノ位ノ。兼テハ為メナリ能ク摂センカ経論ノ浅深ノ義ヲ。覚心不生心ノ行者。捨テ八不ノ猶ホ暗キヲ求メ一道ノ転明ナルヲ。見テ無為ノ寂光ヲ証ス本地ノ常心ヲ。霊山常住ニシテ劫火ニモ不レ焼カレ。曼陀曼殊昼夜ニ而雨リ。見ルト浄行菩薩ノ従リ地涌出スルヲ云云。転証次第所経顕然タリ。求

覚ノ薩埵勿ニレ永ク疑慮一スルコト。非レ如クニハ天台ノ別教ノ有教無人ノ一。若シ不レンハ経者。無キレ有ルニコト是処ノ而リ已。次第行者ノ必ス経ルニコト住心一ヲ。如下シ住シテ初地ニ転スルカ中ニ地ノ位上ニ。

（『興全』下・一一六九～一一七〇頁）

ここでは、漸次の真言行者が、十住心を順に進んでいくことが示されている。中条氏はこの漸次の真言行者を順次往生の行者と判断して、

これらの記述によって、〈順次往生〉とは具体的には、第二住心から第九住心に次第して住するもののことであり、それはまた究極的には、秘密荘厳住心に住する可能性をも内在させたところのものでもあり、更に究極の側から見れば、未だ秘密荘厳住心に到達せざるもののことなのである。[12]

と指摘され、「順次往生」という語が「十住心の過程を順次に進むもの」を指していることを示唆されている。

以上、代表的な研究をいくつかまとめたが、これらを見ても、覚鑁の順次往生に関する見解が未だ明確でないことが解る。そこで、以下、順に「順次往生」について考察して行きたい。

三、覚鑁における「往生」の意味

さて、本章では順次往生を理解するために、まず覚鑁が「往生」という語をいかなる意に使用しているのか検討したい。

そこで、密教行者が往生する浄土として覚鑁の文献中にたびたび説かれる「密厳浄土」がどのような浄土であるかを確認すると、『五輪九字明秘密釈』には

密厳浄土理智不二ノ五仏・五智ハ、即シテ金剛界ニ是レ胎蔵ノ五仏・五智ナリ。

（『興全』下　一一三七）

とあり、金胎両部の曼荼羅世界であることが説かれ、また『密厳浄土略観』では

夫レ密厳浄土トハ者、大日心王之蓮都、遍照法帝之金刹、秘密荘厳之住処、曼荼浄妙之境界ナリ。

（『興全』下　一一八三）

と、「密厳浄土」が大日如来の国土であり、『十住心論』に説かれる即身成仏の境界つまり「秘密荘厳心」であって、浄妙なる曼荼羅の境界であることが説かれている。

以上から、「密厳浄土」の意味内容が即身成仏によって得られる「密教的悟境」を指していることがわかる。

なお、このような覚鑁の浄土の捉え方は極楽浄土についても例外ではない。それを『五輪九字明秘密釈』の以下の一文より読み取ることが出来る。

当ニ知ル十方浄土ハ皆ナ是レ一仏ノ化土。一切ノ如来ハ悉ク是レ大日ナリ。毘盧弥陀ハ同体ノ異名。極楽密厳ハ名異ニシテ一処ナリ。

（『興全』下、一一二二）

つまり、全ての仏は大日如来に、全ての浄土は大日如来

の国土に帰するのであり、大日如来も阿弥陀如来も名前こそ違うが実は同体なのであって、密厳浄土と極楽浄土というのも、名前は違うのであるが、実は一所を指していると言うのである。

この一文より、極楽浄土も密厳浄土に帰するのであり、それらが密教的な悟りの世界と相違するものではないという覚鑁の思想を読み取ることができる。

以上からも、覚鑁の言う浄土が、来世に往生する浄土ではなく、曼荼羅世界である密教的悟境を指すということが理解できるであろう。すなわち、「浄土」を即身成仏によって得られる「密教的悟境」と理解していることを踏まえると、「往生」と言う語についても、「来世に浄土へ往って生まれる」という意味には捉え難い。つまり、覚鑁の言う「往生」とは「成仏」と同義であると考えられるのではないであろうか。

確かに、覚鑁自身が「往生とは成仏を指す。」と明言している文献を確認することはできない。しかし、本項にて検討したように、覚鑁が浄土を密教的悟境と位置づけ、また、本論「一、」で言及したように即身成仏を指して現身往生とすることを鑑みれば、覚鑁が「往生」と言う場合、悟りの境界に到達するという意味であって、密教の「即身成仏」と同義と理解すべきなのではないであろうか。[7]

四、順次往生と三句の法門

前述したように「密厳浄土」とは「密教的悟境」である「曼荼羅世界」を指すと考えられる。また、そのようなことから、覚鑁が「往生」と言う場合には「即身成仏」と同義と捉えることが可能である。以上より、覚鑁にとっての悟境は、即身成仏以外にはないと考えるのが妥当であろう。それでは覚鑁の唱える順次往生とは何を指しているのであろうか。

ここで、注目したいのが以下に挙げる『五輪九字明秘密釈』「第十発起問答決疑門」である。

その冒頭では、「一、」にて引用したように、阿弥陀の九字真言の行者などを考慮せず、五輪門（大日如来の五字真言で成仏を目指す門）のみを修するものに関して機類の差別があるのかという問いかけがなされている。それに対する回答として、五輪門を修するものにも「上根上智で、即身成仏を望み密厳浄土へ往生するもの」と「但信行浅で、順次往生を望み十方浄土へ往生するもの」がいることを説く。その後、以下のような問答が展開されている。

> 問、何ムカ故ニ念ニ誦シテ大日ヲ為ニルヤ十方浄土ノ親因ト。
> 答、此ノ五字ノ真言ハ者十方諸仏之総呪、三世薩埵之肝心ナリ。故ニ持ニ誦スレバ此ノ真言ヲニ随テ思ニ得レ往ニ生スルコトヲ十方浄土乃至弥勒ノ所及ビ阿修羅窟等ニ。同ク九字ノ真言行者於ニテ仏ノ名号ニ。更ニ勿レ作ニスコト浅略ノ思ヲ。若シ入ニル真言門ニ時ハ、諸ノ言語皆是レ真言ナリ。何況ヤ乎ヲヤ。
>
> （『興全』下・一一七八頁）

ここでは、「大日如来の五字真言を念誦することが、なぜその他十方諸仏の浄土に往生することの親因となる

のか。」という問いが立てられている。

この問いに答える形で、大日如来の五字の真言は十方諸仏の総呪であってこれを持誦すれば、その他十方諸仏の真言を唱えることと同じであり、行者の欲する所に従って、どこにでも往生が可能であると説いている。さらに阿弥陀の九字真言（𑖀𑖪𑖿𑖨𑖽𑖨𑖿𑖨𑖽𑖨𑖿𑖨𑖽）を行ずる行者に対しては、真言門では諸々の言語が全て真言であるから、「阿弥陀」という仏の名も同じく真言であるとし、「南無阿弥陀仏」と唱えるときも、顕教の称名念仏のように唱えるのではなく、「𑖀𑖪𑖿𑖨𑖽𑖨𑖿𑖨𑖽𑖨𑖿𑖨𑖽仏」という一つの真言として唱えなくては意味がないことを主張している。

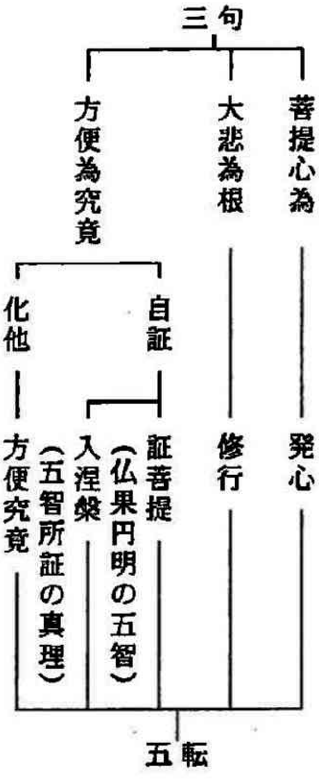
これより、五輪門すなわち大日如来の法門は、十方諸仏に通ずるのであり、阿弥陀仏も例外ではないことが理解できる。さらに、「南無阿弥陀仏」の名号を弥陀の九字真言と同様、真言として捉えていることが解る。

そして、右記に続けて以下に種子と三句（因・根・究竟）の関係を説明して行く。

さて、これ以下では、三句と四転を中心に検討を行うため、これらの構造を一度確認しておきたい。

三句の典拠は『大日経』である。また、四転は『大日経疏』などに説かれる五転より最終段階の方便究竟を除いた四つを指している。なお、五転と考えられる思想は善無畏訳の『破地獄軌』や不空訳の『三十七尊必要』などにも見られる。さらに、三句の『金剛頂経』系典拠について、大沢聖寛氏は頼瑜の『吽字義探宗記』に『理趣釈』『守護経』の二種が挙がっていることを指摘し、さらに自身の研究の中で『五秘密軌』『瑜祇経』『菩提心論』などが考えられるとしている。[14]

ここで、三句と五転が日本密教においてどのように整理されたかを示すため、この二つの関係を図示すると左記のようになる。



（小田慈舟「真言密教の特質（二）」参照[15]）

つまり、五転は三句を開いたものであって、体は同一と言える。

以上を踏まえた上で、「第十発起問答決疑門」の続きを見ていきたい。

此ノ所立者以テ三句ノ法門ヲ摂ス諸ノ行業ヲ。且ク挙テ三部ヲ摂シテ令レハ知ラ一切ノ尊ヲ。𑖀𑖪𑖿𑖨𑖽𑖨𑖿𑖨𑖽𑖨𑖿𑖨𑖽初ノ一字門ハ菩提為因、次ノ二字ハ大悲為根、後ノ一字ハ方便為究竟ナリ。𑖀𑖪𑖿𑖨𑖽𑖨𑖿𑖨𑖽𑖨𑖿𑖨𑖽以テ初ノ字ヲ為レ因ト、次ノ二字ヲ為レ根ト、後ノ一字ヲ為ス

究竟一。𑖀𑖽𑖾𑖿𑖨𑖿𑖪𑖿𑖩𑖿𑖫𑖿三句分別如レ前ノ。総テ諸仏菩薩金剛天等皆有リ二本種子一。其ノ字具スルガ二四転一ヲ故ニ、亦具ス二三句一ヲ。無量ノ三句皆是レ順次往生ノ親因ナリ。

（『興全』下　一一七八～一一七九）

ここでは仮に胎蔵三部（𑖀𑖽𑖾𑖿𑖨𑖿𑖪𑖿𑖩𑖿𑖫𑖿）の種子を使って解説がなされている。例えば、𑖀字には𑖀𑖽𑖾𑖿𑖨𑖿𑖪𑖿𑖩𑖿𑖫𑖿という文字上の四点がある。この四点は順に因（発心）・行（修行）・証（証菩提）・入（入涅槃）の四転を表している。さらに四転は、初めの字（𑖀）が因、中間の二字（𑖽𑖾𑖿）が根、最後の一字（𑖫𑖿）が究竟に当たり、四点の中に三句が包含されている。また、これは𑖀字のみでなく、その他すべての種子についても同様である。この三句の法門について説明した後で覚鑁は「これら無量の尊格に備わる三句の法門は全て順次往生の親因である。」と言う。

さて、真言密教において三句の法門とは空海以来、真言行者の基本であると説かれ、「即身成仏の親因」でなくてはならない。つまり、順次往生が極楽往生を指すとした場合この一文は大変大きな問題となると考えられる。そこで、今一度、真言密教において三句がどのような意味を持つのかを確認するために、以下に空海においてこの三句の法門がどのように説かれているのかを検討していきたい。

五、空海の三句の法門

空海が三句について説いた代表的な書物が『吽字義』である。

空海は「密教の種子には密号密義があり、それをよく知るものは正遍知者（さとりを開いた人）である。密教において初発心の時に直ちにさとりを完成することが可能なのは、字の究極の実義を知るからである。」と、字義の理解こそが、さとりへの近道であることを説明した後に、種子に基づいて三乗の人々の因・行・果を声聞・縁覚・菩薩の順に説明する。そのうち、菩薩を明かす部分にて以下のように言う。

次ニ明ス二菩薩一者。遮那経金剛頂経等ニ説ク二菩薩ノ人菩提心ヲ一為レ因ト大悲ヲ為レ根ト方便ヲ為ス一究竟ト。今此ノ吽字ノ本体ハ訶字ナリ。是レ則チ一切如来ノ菩提心ヲ以テ為スル因ト也。下ニ有リ二三昧ノ耶一。是レ大悲万行ノ義ナリ。上ニ有リ二大空点一。是レ究竟大菩提涅槃之果也。以テ二此ノ一字ヲ一摂ス二三乗ノ人ノ因行果等ヲ一悉ク摂シテ無レシ余。及以ヒ顕教一乗秘密一乗之因行等准シテ知レ之ヲ。次ニ明ス下以テ二此ノ一字ヲ一通シテ摂スルコトヲ諸経論等ノ所明ノ理上者。且ク大日経及ヒ金剛頂経所レ明ス、皆不レ過キ此ノ菩提為因大悲為根方便為究竟之三句ニ若シ摂シテ広ヲ就キ略ニ摂シテ末ヲ帰スレハ本ニ。則チ一切ノ教義不レ過キ二此ノ三句一。束テ二此ノ三句ヲ一以テ為ス二一ツノ吽字一。広スレトモ而不レ乱レ略スレトモ而不レ漏サ。此レ則チ如来不思議ノ力法然加持之所為也。雖ニ千経万論一ナリト。亦

不レ出ニ此ノ三句ノ一字一ニ。其ノ一字ノ中ニ所ノ開ク因行果等准シテレ前ニ思ヘ之ヲ。非ス只タ吽字ニ摂ス如レ是ノ義ヲ一。所余ノ一一ノ字門も亦復如シ是ノ。

（『定弘全』第三）

空海は吽字（𑖌𑖼𑖿）の点画によってそこに、因・大悲万行・究竟が備わっていることを説き、ここに三乗のみならず、顕教の一乗、密教の一乗の因・行・果が収められていることを説明している。そしてこの三句の法門には『大日経』、『金剛頂経』の内容が全て含まれており、密教の教えの複雑な枝葉を全て取り除いてしまえば、最終的にこの三句の法門に尽きると言うのである。さらに、このことは𑖌𑖼𑖿字のみでなく、他の一々の字についても同様に言えるとしている。これを見れば、本論「四、」で挙げた『五輪九字明秘密釈』「第十発起問答決疑門」の文は、論法・内容共に『吽字義』を踏襲していることが解る。そして、三句に『大日経』、『金剛頂経』の内容が包含されていると宣言することから、三句は即身成仏の親因であると理解することができる。

さらに、空海が三句を説いている箇所を探してみると、『十住心論』巻一の異生羝羊住心に入る前に付された大意序の最後に、『大日経』で説かれる三句の法門が全文引用されている。

大毘盧遮那経ニ。秘密主問レシテ仏ニ言ク。「世尊。云何ンカ如来応供正遍知得ニタマヘル一切智智ヲ一。彼ノ得テニ一切智智ヲ一。為メニ無量ノ衆生ノ広演分布タマヘル。乃至如レ是ノ智慧ハ。以何カ為シレ因ト。云何カ為レ根ト。云何カ究竟スル。大日尊答シタマハク。菩提心ヲ為レ因ト。大悲ヲ為レ根ト。方便ヲ為ス究竟一ト。秘密主。云何ナルカ菩提トナラバ謂ク如ク実ノ知ルナリ自心ヲ一。又問スラク。発ス趣スル菩提ニ之時心ノ所住ノ処ノ相続ノ次第ニ幾種カアル。仏具ニ答ヘリレ之ヲ。故ニ経ノ初ノ品ヲ名テ曰フ住心ト一。」今依テ此ノ経ニ顕ス真言行者ノ住心ノ次第ヲ一。顕密二教ノ差別亦在リ此ノ中ニ一。住心雖トモ無量ナリト一。且ク挙テ十綱ヲ摂ス之衆毛ヲ一。

一ニハ異生羝羊住心　二ニハ愚童持斎住心
三ニハ嬰童無畏住心　四ニハ唯蘊無我住心
五ニハ抜業因種住心　六ニハ他縁大乗住心
七ニハ覚心不生住心　八ニハ一道無為住心
九ニハ極無自性住心　十ニハ秘密荘厳住心

（『定弘全』巻第二・七～八頁。「」は筆者の付。）

右記の「」内が『大日経』三句の法門の引用部分である。さらにそれに続けて空海は、「この経によって真言行者の住心の次第を確立するのであり、顕密二教の全てがこの中にあるのだ。」として、十の住心を挙げている。つまり、『十住心論』では、『大日経』の三句（「菩提心為因。大悲為根。方便為究竟。」）を基礎として、十の住心が建てられていると理解することができる。以上のように、『十住心論』に三句を基礎とした十住心の構造を見ることができることから、真言密教においては三句の法門こそが、十住心の基礎であり、即身成仏への道程の基本であると解釈することができると言えよう。

六、覚鑁における三句

さて、次に覚鑁は三句をどのように捉えているのであろうか。まず、覚鑁撰、『真言三密修行問答』において、「大日如来心王法界」について説明する中に、三句の法門を空・仮・中の三諦に当てはめて説明する箇所がある。

> 如上ノ衆徳円満具足セル大日如来心王法界ハ、即チ空ヲ為ニス菩提心為因ノ句ト。即チ仮ヲ為ニス大悲為根ノ句ト。即チ中ヲ為ニス方便為究竟ノ句ト。今此ノ三句三点ノ法門ハ、唯是大日如来心王一法、不縦不横ニシテ、而モ縦横自在也。
>
> （『興全』上・二九五頁）

右記の最後の一文において、三句の法門は大日如来であり、縦にも横にも自在であることが説かれている。さらに、同じく『真言三密修行問答』には、この大日如来に具足する三句三点について以下のような問答がある。

> 問フ、本地法身大日如来、心王法界、三句三点横竪自在、甚深微妙ナルコト、可シ仰デ信ズレ之ヲ。若シ凡夫具縛、衆生念念ニ、縁起スル心法ニモ、又有ニルカ三句三点、横竪自在不思議微妙ノ義一乎。
>
> 答フ、凡夫ノ心法ニ、有リヤ三句三点、微妙不思議ノ義一。与ニ大日如来心王一、更ニ無ニクシ優劣一全ク無ニシ欠減一。
>
> （『興全』上・二九六頁）

つまり、法身大日如来に三句三点があり、横竪自在不思議微妙の義が備わっているように、凡夫なる衆生にも三句三点があり、微妙不思議の義が備わっているというのである。以上より、覚鑁が三句の法門は大日如来そのものであり、法身にも衆生にも同様に具足していると捉えていることが読み取れる。

さらに、『打聞集』（『十住心論』の段）に、以下のような文章がある。これは、「菩提とは如実知自心である」ということに対する注釈部分であるが、その中で三句と十住心が関連づけて説かれている。

> 菩提心為因ト者、行者ノ自心、即チ能求ノ心、即チ所求ノ果也ト云也。十住心ノ中、前七種ノ住心ハ、即チ九界、第十ノ住心ハ、仏界、第八第九ハ、権仏界、望ニテ前七種一名ニケ仏界一ト、望ニテ第十一名ニク菩薩一ト。故ニ名ニク権仏一ト。即チ第十心ノ為ニ、偏ニ為レル因ト故ニ。第八ヨリ殊ニ名ニク如実知自心一ト。第十ノ因故ニ名ニケ菩薩一ト、亦名ニケ真言門菩薩一ト、亦名ニケ入仏道初門一ト、亦名ニク権密教一ト。直ニ為ニ真言ノ為レル因ト故ニ、菩提為因ノ句ノ中ニ摂ス。三句ノ法門ハ表ニ三部一ヲ。三部ノ中、仏部ヲ為レシ主ト為レシ体ト為ス本ト。仏部ト者、所レ謂菩提心也。蓮華・金剛二部ハ枝末ノ故ニ、因ノ故ニ、用ノ故ニ、摂ニ不二仏果一ニ。別ニ不レル説カ時ハ、唯菩提心ノ一種ノミ在リ。以テ此ノ義ヲ菩提心論ニハ若人求仏慧等ノ一頌ハ、菩提心ノ一種ヲ説ク也。仏部不二総体上ノ用ヲ別説スル時、其ノ二部在リ。根本

・究竟ノ二句ハ、唯在二菩提心為因ノ句ノ中一。サレバ此ノ経ハ三句ヲ以テ始終トス。此ノ三句ニ不レ出デ者也。良トハ在二為因ノ一句一ニ。十方三世一切ノ経教、亦在二此ノ一句一ニ。即チ引字ハ諸字ノ根本、父母ノ故ニ。余ノ字ハ皆説ク二阿字ノ一義ヲ故ニ。阿字ノ上ノ理智ノ二義ヲ、根本・究竟ト云フ也。開ケバ即チ三句、収ムレバ即チ一句ナリ。然レバ云何菩提謂如実知自心之一句ニ、総ニ摂ス十方三世ノ一切教法ヲ。

（『興全』上・五一〇～五一二頁）

ここでは、第九住心までが三句のうちの「因」に包摂されるとして、三句を十住心と関連付けて考えている。また、「菩提心為因」はすべての根源である引にあたるから、最終的に三句はすべて「菩提心為因」の一句に集約され、『大日経』の全てが三句を以て始終とし、十方三世の全ての教法はこれに尽きるというように論を展開しており、前述した『吽字義』と同じような論法で、三句を顕密問わず一切の教えの根本であると位置づけている。

さらに、覚鑁撰『十九執金剛秘釈』にも三句と十住心が関係付けて説かれている。十九執金剛とは、『大日経』に於いて説法の会座に列する大日如来の内眷属であり、その内容は『大日経疏』第一に詳述されている。この十九の執金剛に対して、覚鑁が秘儀を説いたのが、『十九執金剛秘釈』である。この秘釈の冒頭には、

今試ニ按ズルニ十九執金剛ノ相ヲ一、大ニ分ツニ三義アリ。初ノ六ハ就テ引字之五転一ニ差別シ、次ノ五ハ歴テ因分ノ住心一ニ施設シ、後ノ八偏ニ寄テ秘密荘厳一ニ判レリ義ヲ。初ノ六ガ中ニ亦為レ二ト。初ノ五ハ別シテ顕シ二五転ノ不同一ヲ、後ノ一ハ総シテ帰ス二不二ノ実際一ニ。

（『興全』上・三八七頁）

とあり、前より順に六番目までの執金剛を五転・三句に、その次から五つの執金剛を因分の住心に、さらに最後の八つの執金剛を秘密荘厳心に配当している。これを見ると、まず三句・五転という基本的な因があり、その上で因分つまり秘密荘厳心以外の顕教におけるさとりの境界を得、最終的に秘密荘厳心に至るという順に執金剛を配当していると理解できよう。

つまり、三句の法門は覚鑁においても空海同様、即身成仏に至るための順因であって、十住心の階梯と密接に関わっていると言えるのである。

七、覚鑁による順次往生の意味

これまでの考察により、三句の法門は十住心の階梯と深い関係があり、即身成仏に至るための順因であると理解することができる。ここで、再度「三、」で挙げた「無量ノ三句皆是レ順次往生ノ親因ナリ。」という言葉に着目したい。覚鑁は即身成仏の順因であり、十住心の根底である三句の法門を順次往生の親因とした。このことから、覚鑁の言う「順次往生」は十住心教学に裏付けられるものと理解することが可能となろう。

そのように解釈した場合、「二、」でまとめた先行研

究の内、③にあげた、順次往生の背景として十住心教学を考えられることを指摘している中条氏の論を再度詳細に確認したい。中条氏は『五輪九字明秘密釈』「第六上品上生現生門」に「正ク為メ真言漸次行者ノ所経ノ位ノ。兼テハ為ニ能ク摂ニ経論ノ浅深ノ義ヲ。…中略…転証次第所経顕然タリ。求覚ノ薩埵勿レ永ク疑慮スルコト。非レ如ニ天台ノ別教ノ有教無人ノ。若レハ不レ経者。無キ有ルコト是処ノ而已。次第行者ノ必ス経ルコト住心ヲ。如シ住シテ初地ニ転スルカ一地ノ位ニ。」とあるうち、住心を順に次第して徐々に秘密荘厳住心に近づく漸次の行者が順次往生の行者を指していると指摘されている。三句の法門が順次往生の親因であり、十住心教学と関係深いことを踏まえて考えると、右記文中の「漸次の行者」は中条氏の言うように順次往生の人を指していると考えることができるであろう。

なお、『打聞集』には

真言機ニ有レ三。一ニ漸、二ニ頓、三ニ超入。

…中略…

超入トハ者有リ多ノ不同ナリ。或ハ至ニ第七・第八・第九ニ。皆名ク超入ト。頓入トハ者従リ羝羊住心一、直ニ入ニ第十住心ニ。是ヲ名ニ頓入ト。漸入トハ者此ノ十住心ハ為ニ真言行者ノ所レ儲ル也。一一ニ経テ入ニルヲ第十心ニ、名ク漸入ト。

（「二経論之談義時也」『興全』上・四〇八～四一三頁）

もしくは、

真言即身成仏ハ、父母所生ノ身ヲ以テ、頓ニ進デ九種住心ヲ経テ、浄菩提心ニ叶フ。此レハ漸機ナリ、超入ノ機ナリ。或ハ有リ頓入ノ機一。父母所生身ヲ以テ、速ニ不レシテ経ニ浄菩提心一ヲ大日遍照ノ位ニ至ル。

（「長承三年正月谷談義」『興全』上・四六五頁）

という文言があり、ここに頓・漸・超の三種の即身成仏を見ることができる。この頓・漸・超は『大日経疏』所説[17]の機根観であり、右記の『打聞集』には、頓入が「途中の段階を経歴せず、直ちに即身成仏する機根」、漸入が「十住心の階梯の一々を全て順次に経歴して成仏する機根」、超入が「途中の階梯の一部を超越しながらも、残りの階梯を順に経歴する機根」であると説明されている。また、「父母より生じたその身そのままに大日如来の悟りの位に至る」と説かれていることから、頓・漸・超全てが即身成仏の機類を指していることも解る。これについては苫米地誠一氏が前述した『五輪九字明秘密釈』「第九所化機人差別門」で説かれる現身往生の「大機」「小機」と比較して、頓入を大機、漸入と超入を小機に分類されている[18]。苫米地氏は「第九所化機人差別門」の「小機」の説明部分で「心数の別尊を本尊として三密行を修行し、本尊の三昧を転じて大日を成ずる機根」と説かれていることを挙げ、「心数の別尊」とは十住心それぞれに配当される別尊を指している[19]として、漸・超を現身往生の「小機」に配当している。しかし、改めて苫米地氏の言う文言を確認してみると、

小機利根ハ、就ク心数ノ別ノ本尊ニ。且ク約シテ観音ノ行者ニ釈レセバ之ヲ、本有ノ九重ノ梵字ハ一切衆生ノ本有ノ観音ノ種子ナリ。依テ慚愧不可得ノ義ニ、能ク

信シテ自性清浄妙蓮不染ヲ覚ニ悟シテ蓮華ヲ、於ニ四時ニ不レ令メ二間断一セ、修シテ三密ノ行ヲ、住シテ開敷蓮華ノ印ニ、誦シテ[梵字]明ヲ。住シテ慚愧不可得ノ理ニ、証ニ見ス本初ノ覚蓮ヲ。是ヲ名ク小機観ノ即身成仏ト。（『興全』下・一一七六頁）

とある。ここでは、小機の利根は、心数の尊格を本尊として修行するとして、仮に観音を本尊とする行者についての説明がなされている。そして観音曼荼羅の[梵字]字の字義である慚愧不可得の境界を証じて、後に更に進んで大日如来の三昧に入証することが説かれている。これによれば、大日如来以外の尊格を本尊として修行し、その後大日如来の境界を目指すことが説かれている。そう理解した場合、「心数の尊格」とは、行者それぞれが無量の尊格の中から自分の修行対象を選び本尊とするという意味に捉えられるのではないであろうか。つまり、「心数の別尊」とあることを、直ちに十住心それぞれに配当される別尊と解釈することは、多少飛躍した理解であると言わざるを得ないであろう。

そこで、本論での考察を踏まえた上で再度分類を皆をせば、頓入を現身往生の大機、漸入を順次往生と配当することができるのはないであろうか。そして、超入機というのはその中間的存在とみなすことができる。

さて、ここで現身往生・順次往生と『打聞集』に出る頓・漸・超の分類を比較したわけであるが、文中に「真言即身成仏ハ、……中略……此レハ漸機ナリ、超入ノ機ナリ。或ハ有リ二頓入ノ機一。」とあるように、頓・漸・超の分類が「即身成仏」の類として説明されており、漸機が順次往生と同類を指していると考えられることに注目すると、やはり順次往生を含む全ての機類が即身成仏の境界を指すと理解するのが妥当であろう。

まとめ

以上、三句の法門を中心に覚鑁の順次往生とはいかなる内容を指しているのかを再検討してきた。右記したように、『五輪九字明秘密』の「無量ノ三句皆是レ順次往生ノ親因ナリ。」という三句の法門が順次往生の順因とする文章に注目すれば、覚鑁の順次往生とは、十住心の階梯を順に登っていき最終的に第十秘密荘厳住心、つまり即身成仏の領域にまで達するということを指していると考えられるであろう。合わせて『大日経疏』所説の機根論である頓・漸・超全てが即身成仏の境界を指し、そこに順次往生も含まれると考えることができることから、順次往生も現身往生同様即身成仏の境界と考えるべきことがさらに明確になったのではないであろうか。

また、これによって本論の「二、」にて列挙した先行研究の内、③に挙げた中条賢海氏の見解を、新たな視点より裏付けるができたものと考える。

すなわち、「順次往生」と「三句」の教学との関連を考えれば、順次往生は「十住心を順に次第して即身成仏に至る機根を指している」と理解するのが一番妥当であると言えるのではないであろうか。

【付記】
本稿は二〇〇六年度の竜谷大学大学院仏教学演習において、浅田正博教授のご指導のもと、大谷欣裕氏（大学院研究生）と日種信

隆氏（大学院修士課程）と筆者の三名にて行った共同研究の中で示唆を得、問題点を設定したものである。本稿の発表に当たっては、浅田先生及び大谷氏、日種氏に深く感謝の意を表したい。

*1宮坂宥勝「興教大師覚鑁の浄土思想」（『現代密教』二号・一九九〇年）三九頁。
*2松崎恵水「成仏思想と往生思想」（『平安密教の研究』春秋社・二〇〇二年）氏によると、この問題については古くは江戸期から議論されているようである。
*3『興教大師全集』は『興全』と訳す。
*4松崎恵水「成仏思想と往生思想」（『平安密教の研究』春秋社・二〇〇二年）六一六頁参照。
*5苫米地誠一「興教大師覚鑁の往生観」（『インド学密教学研究』下巻・法蔵館・一九九四年）氏は『述懐鈔』の記述から、臨終までの間に成仏を遂げることができない場合の副次的な別願として順次往生を願ったが、その往生とは「密厳浄土＝法身大日如来の世界への往生であっても、それは即身成仏ではなく、凡夫のままの順次往生であり、密厳浄土へ往生して後に成仏せんとするものであったといえよう。」と述べている。これに対して『密厳浄土略観』などに見られる往生と成仏については「密厳浄土への往生を即身成仏・現生成仏とし、願行浅弱・機縁未熟な者は応化浄土へ順次往生するが、その応化浄土とは密厳浄土の一部であって、順次往生した者もその浄土で即身成仏すると理解していい」たとする。
*6那須政隆『五輪九字秘釈の研究』（鹿野苑・一九三六年）
*7元山公寿「興教大師の浄菩提心説について」（『現代密教』四号・一九九三年）
*8橘信雄「興教大師覚鑁の成仏思想」（『豊山学報』三六・三七合併号・一九九四年）
*9例えば『釈摩訶衍論愚案鈔』では「この宗の意は、但信する者は現生の中において、十六大菩薩の生を経歴して、次に大日となる」とあり、これは『五輪九字明秘釈』では小機に該当し、即身成仏の範疇で語られる内容である。
*10正機、兼機の分類については本レジュメ脚注　参照。橘氏の理解によると大機は心王の大日如来を本尊とし、小機は心数の本尊によってそれぞれ即身成仏すると述べることから、これを往生に置換すると大機は密厳浄土、小機は十方浄土へ往生し、後に密厳浄土へ往生することになる。
*11中條賢海「往生の人証について」（『興教大師覚鑁研究』・春秋社・一九九三年）
*12中條賢海前掲論文。七二三頁～七二四頁。
*13これについては、松崎恵水氏が「覚鑁のいわれる「往生」とは一つの悟境を表す言葉と考えられ、但信行浅にして念仏往生を願う者がその意楽によって先に一門の応化諸尊の十方浄土のうちのいずれかの浄土に往生し、ついで普門大日如来の密厳浄土に往生する意であることがわかり、しかも順次往生といわれながら、やはり即身に仏果を成ずることを意味するものであることが判明するのである。」と述べられており、はっきりとは言わないものの、氏も「往生」を「成仏」の意に解すべきことを示唆している。（松崎恵水前掲論文・六一六頁）
*14大沢聖寛「吽字義の三句について」（『印度学仏教学研究』九二・一九九八）
*15小田慈舟「真言密教の特質（二）」『種智院大学密教学会』一二・一九七五参照。
*16如是我聞。一時薄伽梵。住如来加持廣大金剛法界宮。一切持金剛者皆悉集會。如来個解遊戯神變生大樓閣寶王。高無中邊。諸大妙寶王。種種間飾。菩薩之身為師子座。其金剛名曰虚空無垢執金剛。虚空遊歩執金剛。虚空生執金剛。被雑色衣執金剛。善行歩執金剛。住一切法平等執金剛。哀愍無量衆生界執金剛。那羅延力執金剛。大那羅延力執金剛。妙執金剛。勝迅執金剛。無垢執金剛。刃迅執金剛。如来甲執金剛。如来句生執金剛。住無戯論執金剛。如来十力生執金剛。無垢眼執金剛。（『大毘盧遮那成佛神變加持經巻』第一「入真言門住心品第一」『大正蔵』一八、一頁、上）

*17 又入此深玄色者。即是如來自證中胎花藏。爾時見五智色。皆同一法界色。何有淺深之殊。而諸衆生。有漸入者有超昇者有頓入者。然其所趣畢竟同歸。故云一切内深玄也。（『大正藏』三九・六四四頁。『大毘盧遮那成仏経疏』巻第六「入曼荼羅具縁真言品」）

*18 この頓・漸・超の機類については、前掲の苫米地誠一氏「興教大師覚鑁の機根論②」・頓・漸・超と密教の機根・（『豊山教学大会紀要』第二一号・一九九三年）が詳しい。

*19 空海は『十住心論』において十の住心それぞれを、単格の境界として説明している。例えば第八一道無為住は観音菩薩、第九極無自性住心は普賢菩薩、大十秘密荘厳住心は大日如来の境界とされている。